ISSN－0913－1906
関西大学博物館彙報
平成23年３月31日 発行

阡陵

No. 62

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]

白釉鉄絵兎文瓶　Bottle with design of Hare（明時代）

◉ 目　次 ◉

村境の神	黒田　一充	2
『キネマ旬報』の香櫨園時代	笹川　慶子	6
文化財建造物の保存と活用　―重要文化財旧西尾家住宅―	藤原　　学	8
藍甕の里で出会った黄金の壷	熊　　博毅	10
平成 21 年度購入資料の紹介　―日本の陶磁器―		12
寄贈資料紹介		14

関西大学博物館
〒564-8680　大阪府吹田市山手町３丁目３番35号
Tel. 06-6368-1171（直通）　Fax. 06-6388-9928
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html

村境の神

黒田一充

奈良県明日香村の石舞台古墳から南へ吉野に続く道をたどると、飛鳥川に架かる橋にさしかかる。そこには川の上に綱が渡され、綱の中央には藁の作り物が吊されている（写真１）。ここが稲渕の集落の入口で、さらに南へ行った栢森の集落が近づいた場所にも同じような綱が掛かっている。現在はお綱掛けと呼ぶが、近世史料にはカンジョウナワと記されている。勧請縄は、奈良県・三重県・大阪府から京都府・滋賀県・福井県若狭地方にかけての府県に多く見られ、おもに年のはじめに集落の入口、寺社の門前や鳥居に新しい綱が張られる。大きな綱には、細い綱や榊の枝、御幣などをその年の月数だけ付ける所も多い。滋賀県では、竹でつくったトリクグラズと呼ぶ輪や榕の束を吊す集落もある（写真２）。

写真１　明日香村稲渕のお綱掛け

写真２　湖南市東寺の勧請縄

写真３　宮古島市平良西原のミーツキツナ

勧請縄と呼ばなくても、このような綱を張る行事は、綱掛けなどと呼ばれて全国的に見られる。いずれも、外界から悪いものが侵入するのを防ぐ装置である。写真３は、沖縄県の宮古島で厄払いの行事として村境に張るミーツキツナやミーピツナと呼ばれる綱で、普段とは逆の左縄で編み、豚骨を吊している。

綱ではなく、藁でもっと大きなものをつくる所もある。大きな草履や草鞋をつくる所が多く、村の外に住む大男が村にやってきては災厄をもたらすため、大きな履物を村境に吊すことでもっと大きな者が村に住んでいることを示して驚かせ、村に災厄を近づけなくするという伝承がともなっている所も多い。

愛媛県西部から高知県西部にかけての地域には、大草履を吊す地区が多く、オオヒト様の大草履とか、鬼の金剛草履と呼ばれる。特に九州へ大きく突き出した佐田岬半島に集中している。地元の愛媛県伊方町・町見郷土館の2003年の報告には、町内の10地区14か所を紹介していたが、実際は20地区ほどに現存するという。

写真４は、豊之浦地区の東端にあるもので、長さ140センチメートル、幅は60センチメートルの大草履以外に、御飯を入れた藁スボとトーバ（塔婆）を吊す。

各地でつくられる村境の履物の中には、大きいものとしては大正初期から始まった横浜市戸塚区の南谷戸（やと）の大草鞋で、約3.5メートルの長さがある。また、兵庫県豊岡市日高町田ノ口の

写真４　伊方町豊之浦の大草履

写真５　豊岡市日高町田ノ口の塞の神

ように、大草履と大草鞋の両方を吊す所もある（写真５）。

履物ではなく藁蛇をつくる所も多く、東京都清瀬市下宿（したじゅく）の円通寺では、５月に疫神などの侵入を防ぐ「塞（ふせ）ぎの行事」が行われる。長さ約16メートルの大蛇をつくり、寺の西側の村境にある赤樫の樹２本の間に掛ける（写真６）。別に小さな藁蛇も旧村境14か所に取り付ける。

関東地方では、寺社で授与されたお札を割竹にはさんで村境に立てる所も多いが、千葉県市川市国府台（こうのだい）では東西南北の境界の樹木にお札を

写真６　清瀬市下宿の藁蛇

写真７　川口市安行原の蛇造り

写真８　横手市大森町上溝字末野の鍾馗様

首に掛けた藁蛇を吊し、埼玉県川口市安行原（あんぎょうはら）でも口の中にお札を納めた藁蛇を村境に据える（写真７）。

東北地方では、藁の大人形をつくる所がある。18世紀前半に出羽を旅した菅江真澄は、『月の出羽路　仙北郡』に、「凡そその尺（タケ）五六尺或は、七八尺に過さる也。杉の葉をもて蓬髪とし板に眼鼻画。藁にて造り、胸に牛頭天王の木札をさし、剣をもたせ、或は木刀をさゝせ、またつるぎさゝせたるあり」と記して「疫神祭草人形」のスケッチを残している。彼が描いた場所の大人形は現在なくなっているが、秋田県では東部の岩手県との県境に沿って、大人形を見ることができる。

横手市大森町上溝字末野では、集落の東を流れる上溝川の西岸に杉の大木があり、７月第１日曜日にそれを背にした鍾馗（しょうき）様の藁人形をつくる。高さ約４メートルで、墨で顔を描き、昆虫のような角を２本挿す（写真８）。各家でも、茅で鹿島様と呼ぶ小さな人形をつくる。背中に銭や餡餅を入れたツツコを負わせ、「賀勢鹿島大神」と記された幟を挿し、家の玄関の柱に括り付けておく。

鍾馗様に御神酒を供えた後、夕方から子供たちがリヤカーに鹿島舟を載せ、鹿島様の人形を集めて廻る。この舟は、木の骨組みに莚を覆った簡単なもので、帆柱に蠟燭を立てる。昔は、旧暦６月７日が鍾馗様づくりで、９日に鹿島送りが行われた。災厄とともに人形を載せた舟を川に流し、茨城県の鹿島神宮へ流れ着くよう祈ったが、現在は解体した前年の鍾馗様と一緒に燃やしている。横手市や南隣の湯沢市周辺には、横手市山内黒沢の約５メートルの鹿島様

や、湯沢市岩崎の約４メートルの鹿嶋様など、大人形がつくられる。

このような村境の大人形は、青森県・秋田県・岩手県のほか、福島県・新潟県・長野県北部に多く残っている。

福島県田村市船引町芦沢には、お人形様の行事がある。かつては５か所で行われていたが、現在は屋形・朴橋（ほうばし）・堀越に残っている。大きな面に杉葉の髪、孤の胴体で薙刀を持ち、腰に刀を差す。高さは約４メートル、広げた両手は約６メートルになる（写真９）。

関東地方の大人形は、非常に数が少なくなっている。千葉県では、君津市大坂鴨畑や袖ケ浦市阿部などで男女一対の等身大の藁人形を毎年９月につくり、団子を供える。鹿島人形と呼ばれ、大坂鴨畑では男はちょんまげ姿で刀を差して槍を持ち、女は髪を結って刀を差して薙刀を持つ（写真10）。阿部ではわざわざ手足の指を１本少なくして、異形の者であることを示している。

茨城県では、鉾田市烟田（かまた）の玄生（くろう）や石岡市井関で見ることができる。玄生の大杉様は、村はずれの杜の入口にあるクヌギの木に括り付けられた約２メートルの人形で、２月・５月・８月に杉葉の衣裳が新しくされる。

石岡市井関には、現在代田・梶和崎・古酒・長者峰の４つの地区で、８月に大人形がつくられる。竹と杉葉を材料にし、一番大きい長者峰は約2.4メートルの高さがある。代田の大人形は、高さ約２メートル、横幅約１メートルで、右手に傘、左腰に刀を挿し、胸や臍などは俵でつくる（写真11）。井関では、この代田だけが市の指定文化財になっている。他の地区は、材料の入手や後継者の問題で指定を辞退されたと聞く。伝統行事を続けていくことの難しさがうかがえる。

写真９　田村市船引町芦沢字屋形のお人形様

写真10　君津市大坂鴨畑の鹿島人形

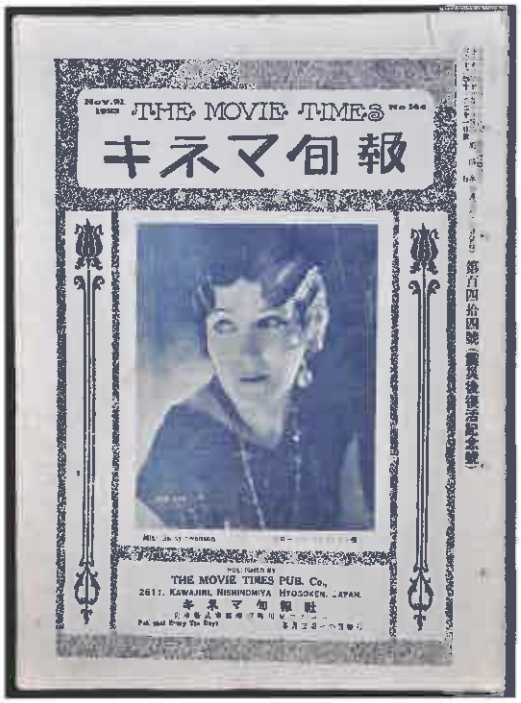
写真11　石岡市井関字代田の大人形

文学部教授

『キネマ旬報』の香櫨園時代

笹川慶子

『キネマ旬報』は東京で創刊された雑誌であるがゆえに関西とのかかわりなどまったくないかのように思われがちだ。しかし、そうではない。関西との関係は創刊者のひとり田中三郎が大阪市内道修町あたりの化学薬品輸入会社・芝川商店に就職したというのもあるが、じつはもっと深い。というのも1923(大正12)年11月21日号から約4年にわたり『キネマ旬報』は関西で発行されていたからだ。関東大震災で東京が壊滅状態になったとき、雑誌の復興をめざす田中は本社を東京の今井町から兵庫県の香櫨園駅近くにある木造一軒家に移し、ここで編集を始める。



震災後復活記念号の表紙。兵庫県武庫郡西宮町川尻2611と記載されている（『キネマ旬報』1923年11月21日号 © キネマ旬報社）

この香櫨園の一軒家は、まるで映画至上宗教の総本山のような場所になっていたようだ[i]。映画を愛する二十歳そこそこの若い同人たちがつどい、監督やスターなど業界人も昼夜を問わず自由に出入りし、語り合う。東京の同人宛に送った手紙の中で田中は香櫨園での生活を「情け豊か、熱あり、歌あり、涙あり、ああ地上の楽園」と綴っている[ii]。

……香櫨園時代は青春の坩堝だった。阪神電車の香櫨園駅で下車、夙川堤を松並木伝いに浜に向かつて約一丁、左にだらだらと下る小径がある。そこを下りて凡そ又一丁ほど行くと、右側の古めかしい門に「キネマ旬報社」の看板をかけた二階家が彼等の梁山泊であつた。五、六人から時には二十人あまりの若者があつまることもあるが、とにかくあまり金のありそうにも思われぬ連中のくせに、出入り商人からの買物は華手で鷹揚だ。近所の者はこの家を「キネマはん」と呼んでいた。

この家に巣喰つているのは…田中、田村、山路、平尾の四人の他に食客として石川俊彦。夜ともなれば、何処ともなくこれらむくつけき若者の友人知人のあつまり来つて談論風発、疲れるとそのまゝ泊まりこんで、翌朝帰つて行く。勝手もとには食パン、リプトンの紅茶、MJBコーヒー、バターの類を年中切らすことなく貯えてあり、階下八畳の間は万年床が敷いてある。だから腹がへつたら勝手もとへ行つて好きなものを食えばいいし、ねむくなつたら万年床にもぐればいい。二階座敷にはブランスウィックの蓄音機がすえられてあつて、チャップリンの作曲したというジャズ・レコードをくりかえしかけては味わう。（中略）

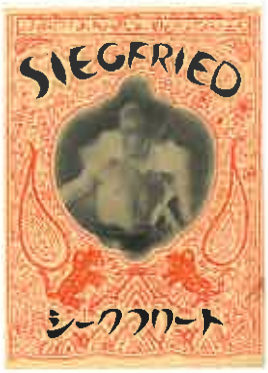
程近き甲陽よりは未来の名監督山本嘉次郎が……夜な夜なあらわれるかと思えば、須田鐘太、鈴木俊夫（ユナイテッド・アーチスツの宣伝部長……）なども出没する。谷幹一、岡田時彦、岡田嘉子もやつて来る。にぎやかなこと、この上なしだ。

学期末ともなれば東京側の当時まだ学生だつた古川緑波、岩崎昶、岡崎真砂雄、内田岐三雄、飯島正、清水千代太たちが押しかけて来るし……如月敏は海水浴場のカルピス・ガールに想いを焦がし、ついにカル

ピスを飲みすぎて腹をこわしたし、緑波は三郎が買いにやつた鯖ずしをペロリと何人前か平らげ、夙川土手の洋食屋のビフテキパイに舌鼓をうち、谷崎潤一郎先生を訪れ、感激の極、雨の中を岡本から跣足で帰つたりしたものである[iii]。

東京からやってきたキネマを愛する若者と、これまたキネマを心から愛する関西の若者が夜の更けるのも忘れて夢中で話し合う、この青春真っ只中の、自由奔放で、渾然たる理想郷が『キネマ旬報』を飛躍させる大きな力となったのだろう。

じっさい、この香櫨園時代を境として『キネマ旬報』は映画ファン雑誌から業界誌へと変貌を遂げる。その象徴が『キネマ旬報』の名物となる三色刷りの折込チラシである。この折込チラシは大阪のイリス商会が、ドイツの名匠フリッツ・ラング監督の『ニーベルンゲン』*Die Nibelungen*（1924）やMGM社の『ロモラ』*Romola*（1924）など輸入映画の宣伝用に始めたのが最初である。ときには役者絵のような色使いの現代劇映画のチラシ、ときには構成主義のような時代劇映画のチラシというように、古い感覚と新しい感覚が混ざりあった広告デザインは関西に花ひらいた昭和モダニズムの色香を現在に伝えている。この折込チラシが業界で評判になり、同誌に広告の掲載を希望する会社が急増する。それとともに情報も充実し、冊子はどんどん厚くなり、発行部数もめきめき増えていった。こうして『キネマ旬報』は業界随一の大雑誌へと成長していくのである。



イリス商会映画部提供の『ニーベルンゲン』折込チラシ（『キネマ旬報』1925年1月1日号 © キネマ旬報社）

ほとんど知られていないが、『キネマ旬報』にとってこの香櫨園時代が重要な転換期であったことは確かである。震災直後、資本やモノ、人の流れは一変し、日本映画界の中心は完全に東から西へと移ってしまう。日活は向島撮影所を閉鎖して俳優全部を京都に移し、松竹も東京営業部以外の事務機能をすべて大阪支社に移して京都に下加茂撮影所を建設する。大阪を拠点とする帝国キネマ演芸（帝キネ）は巣鴨撮影所を閉鎖し、伊藤大輔ら巣鴨派を小阪と芦屋の撮影所に移動させ、なんと月14本もの映画を乱造し始める。さらにユニヴァーサル、パラマウント、ユナイテッド・アーティスツ、フォックスといったハリウッドの日本支社も大阪や神戸に引っ越し、他方、神戸のスター・フィルムや大阪のイリス商会など地元の配給会社は好景気の波にのって勢いを増す。田中三郎が『キネマ旬報』の復興の地としてほかでもない大阪と神戸の真ん中に位置する香櫨園を選んだのは、こういった関西圏の経済的、文化的な動向を見極めてのことだったのだろう。関東と関西に分散していた映画関連会社がいっときとはいえ関西に集中し、新時代の気運が澎湃する中で、『キネマ旬報』もその気運にうまくのって方向転換を果たし、躍進したといえよう。

1927（昭和2）年、香櫨園の人々に「キネマはん」と呼ばれていた『キネマ旬報』の同人たちは復興した東京に戻っていく。その直前、『キネマ旬報』は株式会社となり、田中はわずか28歳で取締役に就任する。キネマの同人が香櫨園で過ごした4年間は『キネマ旬報』が映画雑誌として、また組織として成熟するための有意義な時間だったといえよう。やがて若き同人たちは年を重ね、香櫨園での日々を懐かしむようになる。古川緑波はいう「ああ夢なりき。夢なりき。あんな時世はもう来ない」。香櫨園の一軒家はキネマの同人たちにとって、そして『キネマ旬報』という雑誌にとっても、まさに魅惑的な青春の坩堝だったのである。

---

i　キネマ旬報同人社友語「終刊号に寄せて」『キネマ旬報』1940年12月1日号、91-104、154頁。

ii　岸松雄「現代日本映画人伝（6）　田中三郎（改メ清卿）」『映画評論』1954年3月号、71頁。

iii　同上、71-72頁。甲陽とは東亜キネマ甲陽撮影所のこと。山本嘉次郎は関西で監督デビューを果たし、のちに東宝でエノケン映画を数多く監督、黒澤明の師匠でもある。谷幹一や岡田時彦、岡田嘉子は人気俳優。古川緑波以下の名前は『キネマ旬報』の同人で、彼らが日本の映画研究の第一世代となる。

文学部准教授　大阪都市遺産研究センター研究員

文化財建造物の保存と活用

—重要文化財旧西尾家住宅—

藤　原　　学

はじめに

2011年４月から吹田市内本町２丁目15－11に所在する重要文化財・旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）の館長に着任し、まもなく１年が経とうとしている。最新設備をもった博物館の勤務から、築116年の文化財建造物を管理する立場になり、ある意味刺激的な一年であった。ところで、この旧邸は財務省の所管となり、現状維持が困難な状況であったが、保存を求める市民運動は、32,000人以上が署名する保存請願として結実し、吹田市は文化財としての保存を決定した。以後、同邸を国から借り受け、2005年10月に旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）として一般公開を開始した。

この間、2007～８年にかけて市教育委員会は総合学術調査を実施、関西大学文学部の藪田貫教授・大学院生中井陽一氏によって同家文書の整理と目録編纂が行われ、筆者は建築材である煉瓦及び屋根瓦の調査を行い、執筆を担当した。総合調査報告書は2009年３月に刊行され、同年12月８日に文部科学省は重要文化財に指定した。その後、吹田市が文化財保護法上の管理団体となったが、本件は一般市民による草の根的な保存運動が、文化財を救った吹田市では初めてのケースとなった。

菊花展の会場となった旧西尾家住宅

旧西尾家住宅

西尾家は近世吹田村三組のうち、幕府直轄領である西組の庄屋格の家柄で、同家所蔵文書では、既に正保２年（1645）以前には当地に居住していたことが判明するが、江戸期を通じた同家の実態は必ずしも明らかではない。ただ、吹田西組は宝永３年（1706）に仙洞御料地となって幕末に至るが、島下郡下の４ケ所の仙洞御料の中では最大の石高を誇り、同郡域でも重要な位置にあったと推測する。しかし、現在ここに残された近世建築は米蔵１棟に過ぎない。

壮大な威容を誇る主屋や、蔵・茶室・表門、客便所棟・庭園・待合、そして武田五一設計とされる離れ棟などは全て明治中期以降の造作で、建築史の区分でいう近代和風建築群というべきものである。特に、明治28年上棟の巨大な主屋もさることながら、京藪内家の茶室の写しである積翠庵、武田五一設計の離れ、そして各所に設けられた炉が数寄者の好みとした生活空間を表現している。

西尾家住宅の正面の素晴らしさを上げれば枚挙にいとまがないが、しかし、本住宅の特色は正面以外にも見所がある。調査のため初めて立ち入った時に、計量部屋に敷き詰められた建築煉瓦に目を見張った。煉瓦平手の調整痕と焼成などは明治期の古式煉瓦といえ、実に丁寧な施工であった。壁の組積材である煉瓦の床への施工例はグラバー邸台所くらいしか記憶になかったから、この煉瓦床に驚きを隠せなかった。

さらに煉瓦使用は明治後期～大正期へ続き、通路、台所外壁、客便所、外竈屋、瓦塀などに巧妙に使っている。和を建築の正面に据えつつ、洋を背面に革新的に導入するという、近代和風建築のもう一つの側面を見事に表現している。

文化財建造物の活用と難しさ

旧西尾家住宅は「吹田文化創造交流館」とも名づけられた。文化財をただ凍結保存するのでなく、新たな文化創造の場にしたいとの思いが込められている。そして、なによりも市民が様々な保存活動をしてきた経緯がある。施設は無料で観覧でき、市民ボランティアが施設ガイドを随次行っている。また、各種式典、四季折々の年中行事、また貴志康一生誕の家に相応しいコンサート、茶会や子供茶道教室、書画展など、歴史的建造物として相応しい行事に活用され、来館者は2009年度には10,769人を数え、特に、重要文化財に指定されてからは、遠来からの見学者が増える傾向が読み取れる。

築110年余という年代は、建物本体に大きなダメージが存在するのではなく、建物の維持管理上の問題によって、建物周辺部に朽損被害が発生しているといえる。そのことは、2010年11月に行われた建造物有害虫菌被害調査がその傾向を明らかにした。建築を仔細に見ると、材の朽損や大震災が原因と思える壁のクラック、壁土の劣化、有害虫菌による腐朽や穿孔など痛々しい部分が見えてくる。これは市民の保存活動を継承しつつ、本格的な修理工事を経ずに公開に至ったことによる痕跡でもある。今後、将来にわたって維持するためにも、できる限りこの時点で本格的な修復をしておかないといけない。早期に保存管理計画を策定し、文化庁の指導による保存修理工事を期待したいところである。

街あかり行事で灯火に導かれる旧西尾家住宅

施設の性格上、見学者は高齢者が多い当館であるが、秋のジャズ・ゴスペルコンサートでは、若者が大挙として押しかけて来た。また、地域密着型の公募展「墨を使った作品展」では、小学生や幼稚園児、公民館の書道グループなどが応募、会場では園児たちの賑やかな声が聞こえてきた。

若者が集まったジャズ・ゴスペルコンサート

毎年秋に行われる墨を使った作品展

西尾家住宅は生活のない建築遺構であるが、しかし文化財建造物はその地の生活を見せることを基本とすべきであろう。西尾家で何が行われ、地域の何を表現しているのかを、調査研究によって明らかにし、事業に反映させたいところである。それでも市民ボランティアによって日々生けられている花が、ささやかに生活を表現しており、この熱意を無にすることなく、より良い文化財活用施設となっていかねばと思う。

重要文化財旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）館長

やきもの見聞録(2)　大谷焼（徳島県）

藍甕の里で出会った黄金の壷

熊　　博　毅

「青は藍より出でて藍より青し」ということばがある。青色の染料は、タデ科の１年草である藍から取るが、もとの藍の葉より青くなることから、弟子が師よりもすぐれた才能を現すことのたとえとして使われる。その意をつづめて「出藍の誉れ」ともいう。

このことわざのもととなる藍染めは、昔から阿波国（徳島県）の特産品である。そして、その藍染めに使う大型の藍甕を生産してきたのが鳴門の大谷焼であった。

東林院境内の三石甕

大谷焼は200年以上の伝統を持ち、大瓶や睡蓮鉢など、大型陶器の製造に特徴を有する。また、土の温かみを活かした独特の風合いを持つ酒器や、日常使いの素朴なやきものを数多く産し、それを愛する人も多い。平成15年度(2003)、徳島県では阿波和紙(山川町)、阿波正藍しじら織（徳島市）に次いで３件目となる伝統的工芸品に指定された。

大谷焼のはじまり

安永９年（1780)、豊後国の文右衛門が大谷村山田に立ち寄り、農民たちに土製品の焼成を披露したのがきっかけとなり、山田に瓶窯が築かれたのが大谷焼の始まりと古記録は伝える。

当初、大谷では磁器が焼かれていた。当時は全国的に殖産政策が進展していた時代で、大谷にも藩の役所が設けられ、翌天明元年（1781）から磁器の焼成が開始された。しかし、原料となる陶石や釉薬等が地元では産出せず、九州各地から購入したのに加え、肥前の職人たちを大量に雇い入れて製造したことなどから、結局は採算が取れず、わずか３年で藩窯は廃止された。

磁器から陶器へ

その後、信楽焼の職人から陶器甕の製法を学んだ納田平次兵衛が天明４年（1784)、藩窯の北側に民窯を築き、初めて甕を焼成した。陶土と釉薬を地元の萩原と姫田から調達したため、10年後には利益が出て軌道に乗った。

甕などの日常雑器を中心とした生産であるが、文化３年（1806）には徳島藩の監督下に置かれ、専売制度が始まった。同６年（1809）からは鑑札制度が導入され、製造業者の自由販売が認められるようになった。

近・現代の大谷焼

自営の窯が次々に生まれ、大谷焼が最も活況を呈したのは明治から大正にかけてである。特に大正時代前半は、第一次世界大戦の好景気によって生産量が増大、隆盛をきわめた。

昭和前期には政府の陶磁器統制を受けた時期もあったが、戦後の民芸ブームで大谷焼の生産は再び増加した。

そして静かなやきものの里では、今も７軒の窯元が伝統の甕や鉢、徳利などのほか、食器や花器、美術工芸品などの製作を続けている。

陶祖文右衛門の墓

現在、大谷地区にある四国一番奥之院「八葉山　東林院」の境内の一隅には陶祖文右衛門の墓が祀られている。陶祖の墓所と呼ぶのにふさわしく、中央に立つ「阿波陶祖之碑」をはじめ、脇を固める灯籠などもすべて大谷焼で作られている。

陶祖文右衛門の墓

この墓は昭和45年（1970）５月９日、鳴門市教育委員会によって鳴門市指定史跡に指定され

た。さらに墓所の近くには、大谷焼の窯元の手による藍甕（三石甕）や睡蓮鉢、壷など、いずれも大型の作品が奉納、陳列されている。

金色の壷との出会い

鳴門から大谷へと進み、道路沿いの大型看板にひかれて「陶業会館　梅里窯」に入った。広い店内にはさまざまなやきものが並べられているが、展示棚の一角で午後の日ざしを受け、ひと際きらきら輝く壷を見つけた。「黄金焼締壷（おうごんやきしめつぼ）」である。

陶業会館　梅里窯の展示棚

「理由は分かりませんが、大谷（萩原）の土は、金色が出やすいのです」。梅里窯の代表である女流陶芸家の森悦光さんは、こう語った。以前、全体がこがね色に光り輝く、本当にきれいな作品ができたが、「さすがにそれは手放せず、今も大切に手元に置いています」。

自然は人為を上回る

今から30年ほど前に先代が築いた穴窯は、今も現役。年に一度は火が入れられる。手前の燃焼室と後ろの窯との間に壁があるのが特徴で、ほかではあまり見られない構造だという。

梅里窯の穴窯

焼成には杉と松が使われるが、杉材だけでも5トンにのぼる。大谷の土は柔らかいため、少しずつ温度を上げ、燃焼温度が1100度に達する2日目ころからは窯の外に火が噴き出すようになる。まるで呼吸をするかのように、火が窯の覗き穴から出たり入ったりする光景は、この上もなく幻想的である。

3日に及ぶ焼締めのあとの窯出しは、神のわざを見る瞬間である。薪を使って焼く穴窯では、ときに想像もしない結果が現れる。その人知の及ばないところが、やきものの魅力だと悦光さんは語る。だから窯出しは楽しい、とも。

作品クローズアップ

金彩を施したのではないかと思えるほど華やかな壷。しかし、釉薬は全く使わず、穴窯で焼成された自然釉の作品である。陶土の赤茶色と燻された黒、そして金色のきらめきが、小ぶりの壷の肩から胴にかけて見事な景色を織りなしている。大谷の土が、神の手わざにより穴窯の中で黄金色に姿を変えたとしか思えないほどの艶やかさである。

黄金焼締壷

森悦光さんの子息・裕紀さんは、平成15年（2003）7月31日にテレビ東京で放映された「テレビチャンピオン」の陶芸王選手権で優勝し、初代チャンピオンに輝いた。

「息子は自分のイメージどおりのものを作ろうとしていますが、わたしは土に寄り添い、無理やり自分の形にしようとはしません。作品のイメージは作っているうちに沸いてきますが、無心のときの方が良いものができますね」

自然体のベテラン作家と、新たな意匠を追い求める陶芸家。それぞれの挑戦は今も続いている。

学術情報事務局次長（博物館・出版担当、学芸員）

平成21年度購入資料の紹介

―日本の陶磁器―

平成21年度、当館は昨年に引き続いて日本陶磁器の蒐集を続けた。日本国内での系統的編年的消長を代表するものや技法的特徴に優れたもの、特に鹿背山焼や湊焼など地方窯を中心に蒐集した。

手焙（江戸中期　高12.6cm　径24.2cm）

上田宗品作の手焙である。上田宗品（生年不詳～1769）は、奈良風炉師で、風炉や釜、手焙、火入、灰器などを京都府相楽郡木津に窯を構えて生産した。その器表に奈良赤膚焼初期の特徴がよく表れている。

麻浸し（舌出し）（江戸後期　高7.8cm　径10.4cm　長24.5cm）

舌部裏面

「麻浸し」または「舌出し」と呼ばれる器である。突出する舌部裏面に「御土器師」「春日社」「浅田九兵衛」と線刻がある。本例のように春日社や御土器師の銘があるものがあるが、春日神器ではない。奈良近郊の農村で「奈良さらし」を作る時の道具で、麻の繊維に撚りをかけて糸にするとき、繊維を水に浸すために使われたものであるという。茶道界では、灰器や花生け、盃洗いとして珍重されることがあり、水漏れ防止のため内面に赤漆塗りが施されたと思われる。

男山焼染付水注（江戸末期　高13.6cm　径14.4cm　長22.5cm）

和歌山県有田の男山焼で、伊万里風染付水注である。注ぎ口や取手、器形に歪が大きい。男山焼は、江戸末期に紀州藩の保護のもと伊万里焼に倣って生産されたが、明治初期には衰退する。「仙馬」の銘があり、光川亭仙馬（土屋政吉：1814-87）の作であることがわかる。

鹿背山焼南京赤絵香炉（江戸末期　高7.8cm　径7.3cm）

京都府相楽郡木津の鹿背山焼の南京赤絵香炉である。鹿背山焼は、文政年間に始まり明治期まで存続し、染付、「祥瑞写し」に特徴があった。この香炉も、口縁帯に「玉堂佳」と３字を記し、四賢者と松樹を描いている。

銹絵姥餅皿（江戸末期　高1.6cm　径15.9cm）

滋賀県草津の名物「姥餅」販売のための什器、銹絵姥餅皿10枚組である。表に芭蕉がこの餅を詠んだ句「千代の春　契るや尉と姥が餅」を記している。本来店頭で用いられたが、次第に茶器としても用いられた。

湊焼茶碗（江戸末期　高7.3cm　径11.5cm）

大阪府堺市湊にあった湊焼茶碗である。「吉右衛門」の陶印がある。赤褐色の発色が美しい軟陶である。

楽焼灰器（江戸後期　高7.8cm　径17.5cm　長18.8cm）

楽焼灰器で、「久楽」の陶印がある。初代久楽が千家に出入りして楽焼を始め、二代弥助が紀州偕楽園焼に招かれて、紀州藩主から「久楽」の印を授けられたことにより、和歌山で焼れた楽焼には「久楽焼」の名がある。

川名焼銅版染付火入一対（江戸末期　高9.5cm　径10.5cm）

愛知県名古屋市昭和区にあった川名焼の銅版染付火入一対である。染付磁器で、大量生産のため銅版転写による文様を特徴としていたが、明治20年頃に生産されなくなった。

紀州瑞芝焼染付盃（江戸末期～明治初期　高3.7cm　径8.5cm）

紀州偕楽園近くの瑞芝焼窯で制作された染付盃である。口縁に金漆による補修がある。

（山口）

寄贈資料紹介

平成22年度、本学校友である遠山慶一氏から、貴重な品々の寄贈を受けたので、紹介したい。旗指物１点、火事装束胸あて１点、陣羽織１点、羽織４点、柳行李１点、裃上下計２点、袴２点、煙草盆一式、矢立と印籠各１点、弓術秘伝書２葉に、朱漆塗り重箱１組や粟おこし木箱１点の合計19点で、すべて遠山家に伝来したものである。

旗指物には、赤地に金文字で「遠山ちん二ろ（じんじろう、甚二郎の意）」と記されている。遠山甚二郎は、徳川側の大名井伊直正に仕えて、元和元（1615）年５月、豊臣氏が滅んだ大坂夏の陣で没した。旗指物は、戦国期の大名の軍勢が、敵味方を見分け、また武功を記録するための目印旗であり、井伊家は「赤備え」の軍勢として知られ、この赤い旗指物は、戦国期武将の装備品として象徴的な品物である。

旗指物

陣羽織などの衣装は、四国松山藩に仕えた遠山新八が着用した品々である。火事装束胸あては、武家の火消し隊が消火作業に出陣した際に着用された耐火防護服で、丸に横三本井桁の遠山家の家紋を付ける。陣羽織は、柿渋染の麻生地で、背中に遠山家の家紋を付け、武運長久を祈る南無妙法蓮華経などを墨書する。合戦働きのための実用的な陣羽織で、貴重な資料である。

火事装束　胸あて

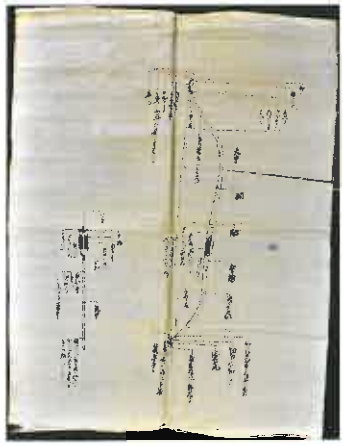
陣羽織

柳行李に入った桔梗紋黒羽織を含む羽織４点には、麻の暑期向きのもの、裏地のある寒冷期向きのものがある。裃上下は、江戸時代の武家が登城するなど出仕する際に着用した正装である。萌黄色の木綿生地に遠山家の家紋をそれぞれ配している。

羽織

羽織を収めた柳行李

裃上下



弓術秘伝書

煙草盆　印籠　矢立

朱漆塗り重箱1組、粟おこし木箱

弓術秘伝書は、武家が武術を伝えるための指南書で、精緻な解説が認められる。印籠や矢立は、屋外での必携品で、煙草盆は、屋内での喫煙用具である。朱漆塗り重箱は、４段の小ぶりなもので普段使いされたと思われる。粟おこし木箱は、上方から粟おこしを入れて四国松山まで運ばれたもので、流通の実態が見てとれる。

博物館では、遠山慶一氏から寄贈された貴重な品々を、広く展示公開し、教育研究のため活用していきたいと考えている。　（山口）

◆博物館だより

◇11月14日(日)から19日(金)まで博物館実習展を開催しました。今年度は「粟おこし」「化粧から化SHOWへ」「たばこ再考」「上方浮世絵」「ひなまつり」の5班が、博物館学課程の集大成として展示会を完成させました。また、日曜日を特別開館したところ、実習生のご家族や展示に協力いただいた企業・諸団体等関係者の皆さまが多数ご来館くださいました。会期中に804名のかたにご覧いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

◇平成22年4月に、大阪都市遺産研究センターが設置されました。これは、平成17年度から21年度に事業を展開したなにわ・大阪文化遺産学研究センターの成果を受け継ぎ、平成22年度から26年度の文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として採択されたものです。大阪都市遺産の歴史的検証と継承・発展・発信を目指す総合的研究拠点として、大阪の都市景観の変遷を歴史的に分析し、その全体像の解明を目指します。

◇植田兼司様から神田孝平揮毫「守眞」および神田孝平旧蔵石器類絵葉書をご寄贈いただきました。神田孝平は明治期に活躍した考古学者で、初代兵庫県令、貴族院議員を歴任し、東京人類学会会長も務め、本館収蔵の本山コレクション形成に大きな役割を果たしました。また、植田様からは、教育研究資料として、仏具鈴（りん）をお預かりしました。天王寺茶臼山の邦福寺で天保三年に作られた直径44cmの大形の鈴で、江戸時代の寺院仏具の典型です。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

◇3月5日（土）から27日（日）まで、伊丹市にある柿衞文庫で、関西大学図書館と博物館が所蔵する近世・近代の名品40点余りを紹介する「関西大学所蔵名品展『知と美の集大成』」を開催しました。社会貢献事業の一環で、学外の施設を使って共催する初めての展覧会となりました。博物館では、菅楯彦の「職業婦人繪巻」や木村蒹葭堂が旧蔵した鍬形石などを出品しました。

◇4月1日（金）から5月15日（日）まで、平成23年度企画展「関西大学博物館蔵　本山コレクションの由来」を開催します。併せて、昭和36年に末永雅雄先生や横田健一先生らの尽力によって創設された本学博物館学課程が50周年を迎えることから、関連小展示会を開催します。皆さまお誘い合わせのうえ、ぜひご来館ください。

・・・編集後記・・・

『阡陵』第62号をお届けいたします。表紙は、今年の干支にちなんで、白釉鉄絵兎文瓶（明朝初期）です。白化粧地に鉄泥で動きのあるユーモラスな兎を描き、その上から無色透明の釉薬をかけて焼いたものです。背面のいささか崩れた書体の「信福」と「寿」といい、磁州窯（河北省磁県）の民窯で焼かれた作例と考えられます。鉄絵とは、弁柄（酸化第二鉄）や黄土などの含有鉄泥で絵付けする技法のことで鉄沙ともいい、日本では絵高麗ともよんでいます。

博物館では、ここ2年ほど続けて仏像模型を新収しています。昨年は脱活乾漆造仏像構造模型を収蔵し、今年は仏師の矢野健一郎先生にお願いして仏像（僧形）寄木模型をお作り頂きました。教育研究に活用していきたいと考えています。

前博物館長の上井久義先生が平成22年度秋の叙勲で瑞宝小綬章を受賞されました。ここに今回の栄誉を心から祝福申し上げます。

関西大学博物館彙報　No. 62　平成23年3月31日　発行
関西大学博物館　編集